



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌の高校生はアフリカの児童労働をどのように学び、フェアトレード活動をどのように行ったか：演劇的手法を用いた「国際協力」の授業
Author(s)	加藤, 裕明
Citation	北海道地域文化研究, 5
Issue Date	2013-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63710
Type	journal article
File Information	kato201303.pdf



**札幌の高校生はアフリカの児童労働をどのように学び、フェアトレード活動をどのように行ったか
—演劇的手法を用いた「国際協力」の授業—**

札幌清田高等学校
加藤 裕明

はじめに

本論文の目的は、札幌の高校生が、アフリカ・ガーナの児童労働、フェアトレード（公正な貿易）について考え行動した国際理解教育の授業実践を報告することである。

教室において教師が知識を一方的に伝達する授業から、生徒が自ら活動し知を獲得する問題解決型授業への転換を図る動きが現代教育の大きな課題の一つである（渡部, 2001, 2002）。とりわけ、環境教育、平和教育、国際理解教育といった、現実のグローバル化に対応する学びを必要とする分野においては、一方的な教師による知識伝達・注入型授業では生徒の学びを深化・発展させることには限界がある。グローバリズムの進行する現実社会においては、単なる知識を「理解」することだけでは意味をなさない。生徒自らが知を獲得しそれを実際の行動に移していくことが求められる。しかし高校現場における学習指導要領の扱いには課題が多い。たとえば2002年度から導入された「総合的な学習の時間」は、教科横断的な教育の契機とはなったものの、現実の学校現場とりわけ普通高校においては従来の教科指導そのものの改革や見直しを図るまでには至っていないのが実情である。

本論文では、2012年に筆者自身が勤務する高校において実施した「国際協力」

の授業「フェアトレード」を取り上げる。「フェアトレード」とは、一般に「公正な貿易」と訳される。先進資本主義国の経済的利益は、開発途上国の人々に対する不当に安い賃金と児童労働の上に成り立っているとの反省から、途上国の人々の労働に見合う対価を支払うと同時に児童労働¹をなくすための取り組みが様々なNGOの活動によって行われている。その方法と実践の総体を「フェアトレード」と呼ぶ。

本授業「フェアトレード」は、高校生が実際に「フェアトレード」に参加することを最終目的とする。その動機を深め、より積極的な参加を促すため、ロールプレイ（シミュレーション・ゲーム）や調べ学習、プレゼンテーション、寸劇といった演劇的手法を用いた。授業に演劇を用いる教育方法に関する研究は、「総合的な学習の時間」の導入とともに近年大変盛んになってきている²。しかし先行研究においては初等教育段階の児童・生徒を対象にしたものが多く、後期中等教育段階すなわち高校生を対象とした実践研究は、研究史の中でも未だ深められるべき課題を残している³。そもそも教育実践は、いまそこにいる生徒とともに試行錯誤を繰り返す中で深められていくものである。特に演劇を教育に用いる場合、所定のカリキュラムがあるわけではなく、実践家の経験と試行錯誤によって積み上げられていく経験主義的な要素を持つ（高尾, 2002）。

以上をふまえ、本論文では、高校生を対象に演劇的手法を用いた「フェアトレード」の授業を対象に、高校生自らが活動しより豊かな知を獲得していく獲得型授業としての課題を検討する。その際、役割を演じることを重視する「ドラマ教育」と、観客を想定した「演劇教育」と

の関係性にも注目しながら、実践を批判的に検討していきたい。

教科・科目の教育課程上の位置づけ

「国際協力」は清田高校グローバルコース2年生に設けられた学校設定科目である。グローバルコースは、国際社会における「地球市民」の育成を目標として2005年に開設された。1年次の「国際人権」、2年次「国際協力」そして3年次の「ワールドスタディーズ」(各1単位)とを合わせ学校設定教科「国際理解」を構成する。このうち「国際協力」は国際社会の諸問題に関する単なる座学ではなく、ひとつのテーマに関する調べ学習やプレゼンテーション、フィールドワーク、ボランティア活動等生徒たちが主体的に活動するプログラムをもって構成されるのが特徴である。その学習目標は既存の教科・科目の学習目標を横断的かつ総合的にまとめあげる役割を担っている。例えば「高等学校学習指導要領」「第一章総則」では、「国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓く主体性ある⁴⁾生徒を育てることをうたう。また、既存の教科では「地理歴史」の「目標」(第一款)において、「国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する⁵⁾生徒を育てることがうたわれている。教育内容で「国際協力」の目標に特に近似する内容をもつ科目は「現代社会」である。その内容に関しては、「国際社会における貧困や格差について理解させ、国際平和、国際協力や国際協調を推進する上での国際的な組織の役割について認識させるとともに、国際社会における日本の果たすべき役割及び日本人の生き方について考察させる。⁶⁾」と述べられている。これら既存の教科・科目の学習目標、学習内容に密接な関連をもちながら、「国際協力」では、単に国際社

会の諸問題、諸矛盾を「理解」するに留まらず、具体的な生徒一人一人の行動に結び付けようとする点が特徴的である。

1 研究の対象と方法

本論文で取り上げる分析の対象は、2012年4月から7月まで、札幌清田高校2年生(グローバルコース、男子7名女子33名)において実施した学校設定科目「国際協力」の授業である。授業担当者は主たる授業者である筆者のほかには地歴・公民科のH、英語科のIの3人である。一昨年まではHが主たる授業者として授業を担当してきたが、今年度は担任である筆者が中心的に担当することとなった。本論での分析に用いる資料は主として以下に示す5点である。

【資料】

- A 筆者の授業実践記録「国際協力授業記録2012」
- B 2012年6月20日に生徒が作成した「パフォーマンス進行台本」
- C 2012年6月27日に実施した生徒のパフォーマンス(寸劇等)における教員H、Iの参与観察結果(筆者によるH、Iへの聞き取り調査)
- D 2012年7月18日(木)に生徒が記述した授業に対する感想文
- E 2013年3月6日(水)に生徒に対して筆者が行った聞き取り調査

本論文では以上を資料として組み合わせ分析に用いることとする。なお本文中では、【資料A】というように記し、分析の根拠を示すこととする。

2 「演劇教育」と「ドラマ教育」との関係性

上演(観客)を想定せず、役割を演じる中で対象となる人物の内面を経験する、その「過程中心の活動を行う教育⁷⁾」を、演劇教育一般とは区別して「ドラマ教育」と呼ぶ。

本論で用いる「演劇的手法」とは、両者すなわち観客を想定しない「ドラマ教育」と、観客を想定した「演劇教育」との両者を含み込んでいる。「ドラマ教育」としては、対象（ガーナのカカオ豆生産に従事する家族、子どもたち）に対し生徒が向き合い、内面的な一体化をはかることを重視する。加えて今回、上演を前提とした「演劇教育」を目指したのは、学校祭において「フェアートレード」商品を販売するという行動を、授業の最終目標に設定したと関係する。生徒が実際にフェアートレード活動を行い、一人でも多くの人に来場してもらうという目的をもって、演劇的表現を発表することとしたのである。学校祭に向けてはこの点において「観客」を想定している。

従来の先行研究では、上演か非上演かといった二項対立によって演劇教育は分節化され論じられてきた。例えば、「クリエイティブ・ドラマの母」と呼ばれるアメリカのウィニフレッド・ウォード（1884-1975）や、その後継者とされるジェラルディン・シックス（1912-2005）は、上演の教育的意義を否定しているわけではないが、子どもたちが対象となる人物の内面を経験する過程そのものを第一に重視した実践研究を展開した（小林、中島、2010）。

ウォードやシックスに比べ、より明確に観客を排除したドラマ教育を推進したのはイギリスのブライアン・ウェイ（1923-2006）である。彼は「ドラマ教育」は演ずる者が学ぶための活動であり、観せるためのものではないとして上演を否定した（ウェイ、1977）。

しかし、演劇の持つ総合芸術としての教育力は、上演か非上演かという二項対立で論じられるべきものではないだろう。なぜなら、非上演を主張する研究者は、子どもたちが上演や観客を意識するあまり、対象に対する内面的一体化をはかろうとする集中力が削がれてしまうという理由で上演を斥けている

からである。そこでは上演そのものの意義について深く論じられることがなかった。しかし、ドラマ的行為に集中して取り組み、なおかつそれが鑑賞にもたえうる表現として観客とコミュニケーションするための上演につながることは決して排除されるべき事ではないだろう。とりわけ後期中等教育段階の高校生にとっては、ドラマによって対象の内面的世界に深く同一化する経験とともに、それをより広い観客の前で発表・上演するという経験が重要ではないか。上演することによって、自分たちの活動を観客の前にさらし、批評を受け、他者とコミュニケーションする機会が得られるからである。対象人物の内面的世界を経験するとともに、それを多くの観客と分かち合う表現の統一的、総合的な把握が目指されるべきではないだろうか。

ドラマによる内面の同一化を重視する「ドラマ教育」と、観客とのコミュニケーションを重視した狭義の「演劇教育」との関係を以上のように整理した上で、次に「国際協力」の年間授業計画における授業「フェアートレード」（公正な貿易）のねらいをみていきたい。

3 授業「フェアートレード」（公正な貿易）のねらい

2012年度の年間授業計画表（表1 以下「シラバス」と略）に示す通り、「国際協力」の授業における「学習の目標」は以下の3点である。

- ① 地球市民としての視野に立ち、第三世界における人権や異文化への共感的、実感的理解を深める。
- ② 国際協力を具体的な活動として実践できる力を養う。
- ③ 国際協力に関し、新聞を中心とする資料を収集し、各紙の論調を比較し考察するメディア・リテラシーの力を養う。

「国際協力」は、1年次の「国際人権」での学習をふまえ、国際協力の課題に取り組み、その現状と原因を考察し、世界と自分との関係を認識した上で、生徒たちが現実の国際社会の課題に対しその解決に向けた一步を踏み出すことを目標とする。したがってその授業は、教師からの一方的な伝達と注入を生徒が座して記憶するというものではありえない。調べ学習、プレゼンテーション、ロールプレイ（シミュレーションゲーム）、ボランティア活動等、実践的な活動が柱となる。特に上半期の授業は、現実社会にコミットする実践的な行動を柱として構成される。下半期のはじめ（10月）には、マレーシア・シンガポールへの海外見学旅行を行い、日本で学んだことをアジアという国際社会の場において実行する。例えば、札幌のNGO「飛んでけ！車いす」の活動で整備した車いすを、自宅からマレーシアの福祉施設まで自ら運び届ける国際ボランティア活動はその一例である。そして見学旅行後は、1年間の「国際協力」のまとめとして、各自がテーマを見つけ個人研究として小論文にまとめる活動で締めくくる。

本論文であつかう「フェアートレード」は、現実社会で進行するグローバリズムの矛盾を際立たせる格好のテーマである。グローバルコース開設（2005）以来上半期の主要なテーマとして継続されてきた。

現在のグローバル社会において、日本を含む先進資本主義国は、開発途上国の資源と労働を不当に安く収奪し利益を上げ「繁栄」を築いている。消費者である私たち日本人がその構造の一端を支えているのである。その矛盾を高校生に気付かせ、解決に向けた行動として小さくとも一步をふみ出させたい。それがこの授業のねらいである。

4 実際の授業展開

（1）導入 DVD『おいしいチョコ

コレートの真実⁸⁾』視聴（1時間）

「シラバス」には4月の最初の時点で、まず映画『おいしいコーヒーの真実⁹⁾』視聴とある。「フェアートレード」の導入として、コーヒー豆生産が、南米やアフリカの農民の収奪の上に成り立っていることを実感してもらうために視聴した。が、生徒の反応はいまひとつ芳しくない。そもそも高校生は日常、コーヒーを大人ほどよく飲むわけではない。実際にクラスの生徒に手をあげてもらったところ、普段コーヒーを飲まないという生徒が半数以上を占めた。コーヒー豆を題材に授業を進めても、生徒の興味・関心を十分に引き出すことは難しいと思われた。そこでコーヒー豆ではなくチョコレートの方が生徒にとってはより親しみがわき、それだけ切実な理解が得られるのではないかと考えた筆者は、Hと相談した上で急遽「シラバス」を修正することとした。すなわちコーヒーではなくチョコレート（カカオ豆）を題材として「フェアートレード」の授業を展開することとした。

DVD『おいしいチョコレートの真実』の映像内容では、カカオ豆を生産するアフリカ・ガーナの農村の暮らし、学校の様子、子どもたちによる収穫作業、児童労働が起きる背景、貿易のしくみ、児童労働をなくすための取り組み等が映像によって紹介される。そして、「チョコレート」という身近な食べ物について深く知るための「チョコレートクイズ」が続く。

第1問は「チョコレートの原料カカオの実はいずれか」（ヤシの実などの写真を見せる四択問題）、第2問「カカオ豆が最も多く作られている地域は世界のどこか」（正解：西アフリカ地域）、第3問「日本人は、年間一人あたり何枚分の板チョコを食べているか」（正解：31枚）、第4問「日本が最も多くカカオ豆を輸入している国はどこか」（正解：ガーナ 67%）第5問「アフリカでは子どもの

何人に一人が児童労働をしているか」(正解: 4人に1人)

クイズに答えながら、生徒は歓声をあげる。身近なチョコレートについて意外な真実が隠されていることを知り、生徒の関心は高まる。5問全問正解者には、札幌市内のフェアートレード商品を扱う小売店¹⁰から仕入れた「フェアートレードチョコ(破片)」をあげるよ、¹⁰という教室のボルテージは一気に上がる。もらった生徒からは歓声があがり、もらえなかった生徒からはため息が漏れる。最終的にクイズに正解しなかった生徒には市販されている某有名メーカーのチョコレート(破片)を食べさせる。と同時に市販のチョコの価格がフェアートレードのその5分の1であることを確認する。クイズの正解に一喜一憂していた生徒の表情には単純な笑いはすでにない。後に紹介する感想文にうかがうことができるように、自分たちが日常好んで食べるチョコレートが、ガーナの子どもたちによる児童労働の収奪によって生まれたものだ気付いたためである。

(2) 展開 (I) ロールプレイ (2時間)

シミュレーションゲーム「家族のお買いもの体験グループワーク¹¹」を実施する。このゲームは、ガーナと日本の計6家族(疑似家族。日本2、ガーナ4家族)ずつの家族に分かれ、それぞれの家族の構成員(父親、母親、兄弟、姉妹…)になりきって、互いに家族を紹介しあうというものである。自分が誰かの役割を引き受け、その人物になりきって演じるロールプレイ(役割演技)の手法が用いられている。ガーナのカカオ農家の家族になりきって、日本の家族と対面するシーンを疑似体験しながら、そこで生じる感情を実感的に理解するねらいである。具体的なドラマ的行為(アクション)としては、「自分の家族」が普段どのような買い物をしているか、その内容を対面した相手家族に紹介することに

よって、それぞれの家族の格差を実感するのである。

ガーナの農家「マハマ」家は収入8。手持ちの「お買い物カード」もわずかばかりの日用品のみである。一方、日本の家族「高橋」家の収入は300。買い物は旅行、自動車、家電製品などガーナの家族には生涯かかっても手に入らないようなものばかりである。グループに分かれゲームを行う生徒の口からは率直な声があがる。特に声上がるのはガーナの家族を演じたグループからである。いま筆者の「授業実践記録」(【資料A】)から当日のゲームの中で上がった生徒の声を抜粋してみよう。

「マハマ家」の母は「アナン家」の農園で働いている。アナン家の三女マリアが「兄弟のうち4人はアメリカに留学しています。ときどきパパが家にバンドを呼んでパーティーをするのが楽しみです」という自己紹介に対し、他の生徒からは「**すげー!**」「**ちくしょう、金持ち!**」等の声があがる。ガーナ国内の格差を実感する。これに対し、マハマ家の息子コフィーが「(仕事をする中で)ナタで自分の足を切ってしまうこともあるんだ」と言うので教室のあちこちで「**エー!**」という声。さらにマハマ家はこのあと、母がアナン家の農園を解雇され収入が0になる。それを知った該当班の生徒からは思わず、「**悲惨! うち、使えるお金、なんにもないじゃん!**」「**収入0になっちゃった!**」といった声があった。

一方日本の家族の自己紹介では、収入300の高橋家の長女さやか(12歳)が「毎年夏休みに家族で行く海外旅行が楽しみです」というと、「**ウエー! ざけんな!**」等の声があがる。

授業を終えた3ヶ月後の7月18日(木)にとった振り返りのアンケートには、このゲームについて以下のような生徒の感想(【資料D】)が見られる。

*「一番衝撃を受けたのは、シミュレーションゲームのときでした。自分の班の設定が、ガーナの家族で、どの班よりも金がない設定でした。日本とガーナの違いを身をもって知りました。自分の班の賃金は5でした。ですが日本の賃金は100、200とかなり大差がありました。今まで、自分自身の中で日本はガーナと比べかなり裕福だと知っていましたが、これを数値で表すと、その差の大きさに驚きました。ゲームではありますが、それでも現実に似せて作られていたので衝撃は大きかったです。」(M.K)

*「シミュレーションゲームも楽しく“ゲーム”としてやっている事がどこかの国の誰かの現実だと思ってこわかった。」(S.N)

*「DVDでフェアトレードのことを見たときに、かわいそうとか、大変そうだなとかって思ってたけど、シミュレーションゲームで本当にこういう生活をしてる人がいるんだな。と思うと、かわいそうとかの一言ですませてはいけなと思った。でも、その時はどういう風に行動にうつせば良いのかもわからないでしょうと思った…」(S.A)

*「シミュレーションゲームでは自分はそんなに貧しくはなかったけど、極貧Familyになったクラスメートはゲームなのに本当に悲しんでいた。発展途上の家族の気持ちがわかった。心が痛かった。」(H.W)

以上の感想には、授業前と後における生徒の変容が率直に表明されている。ロールプレイを行う前までは、単に知識としてアフリカと日本の経済格差を「知って」いたにすぎないが、役割演技を引き受けドラマ的行為を行うことによって、「格差」という文字が実感としてすなわち「心が痛い」経験をともなう生徒の腑に落ちている。しかもそのドラマ的行為は、ガーナの実情をDVD映像で見るよりもはるかに強い「衝撃」と「現実」感を与えていることがうかがえる。そしてこのドラマを経験して、生徒は日本人として毎日の

生活を送っているにもかかわらず、ガーナの親としてまた子どもとして「本当に悲し」み、またガーナのように貧困に苦しむ人は「本当に」いるのだ、「怖い」という内面的な同一を経験したことが読み取れるのである。そしてそのようなリアルな感覚に襲われながら、では「どういう風に行動にうつせば良いのか」という疑問が生徒の中に生まれてきた。そこで次の時間から、調べ学習によって課題解決の方法を生徒自身が探る作業に移っていく。

(3) 展開(Ⅱ) 調べ学習：(調べ2時間、発表2時間。大学生との意見交換含む)

ロールプレイによって、ガーナの家族に対する内面的な同一化を経験した上で、次に「チョコレート」をテーマに調べ学習を行う。班ごとに調べる内容が同じにならないよう、最初に筆者の側で調べる柱を提供した。

その柱とは、①チョコレート産業の歴史、②チョコレート産業の現在、③チョコレート農園の労働の実態、④農園で働く家族と子どもたち、⑤先進国企業の貿易、カカオ豆の取引である。①～⑤の柱に沿って、10班各般、図書室の書籍やCALL教室(コンピュータ教室)等のインターネットを使って調べ、調べた内容を模造紙にまとめ、プレゼンテーションを行った。

当日は、5、6時間目を二時間続きとし、北星学園大学の学生サークル「フェアトレード」の大学生にもこのプレゼンテーションを見てもらった。発表が終わったあと、大学生男女4人をまじえた意見交換会を行った。

北星学園大学の学生からは、自分がなぜフェアトレードに取り組んだのか、フィリピンのごみ山で何を見、何を感じ、現在の自分の生活についてどんなことを考えながら生活しているのか、といったことが語られた。

(4) 展開(Ⅲ) 演劇的スキット(進行台本)の作成と発表(2時間)

授業の一環として、毎年7月にある学校祭で「フェアートレード」を実施してきた（今年で7年目）。会場にやってきた保護者や地域住民、他校や本校の一般生徒に実際に商品を購入してもらう活動である¹²。

今年はひとりでも多くの人にフェアートレードを知ってもらおうと「フェアートレード」会場（歴史教室）に授業で作成した模造紙を貼った。さらに今年は、会場にひとりでも多くの来場者を呼び込むため、何かパフォーマンスをして「フェアートレード」の大切さをアピールしようと授業の中で筆者が生徒に提案した。具体的には全10班に進行台本を作成させた。台本をどのようにまとめるかは自由とした。ただしモデルとして1年時の秋に宿泊研修で行った「テレビ番組」を参考にしてつくとよいと言いつつ添えた。スキット作成中の様子はどの班も思いの外楽しそうであった。出来上がったスキットのジャンルは、演劇だけではなく、ニュース番組、ドキュメント番組、CM、紙芝居、アニメ番組、コメディ、料理番組、クイズ番組等である。このスキットに基づき、全班が授業のなかで発表した。

参与観察者としては筆者のほか、教員H、I及び教頭Oが参加した。発表にあたっては、教室内の配置をコの字形にし、真ん中を発表スペースとした。各班持ち時間3分以内で発表した。その後最もよかったと思う班を生徒の投票で選び、学校祭当日にそのスキットを有志で発表することにした。以下に選ばれたスキットを2点紹介する。

スキット1「万引き」（5班）

《登場人物》

- ・犯人①
- ・犯人②
- ・サツ（警察官）
- ・店の人

《話の展開》

・犯人がチョコを盗む→店の人が見つける→店の奥に連れられていく→警察官が来る→犯人ふたりは自分たちが万引きしたチョコがフェアートレード商品であることを知って深く反省する。

スキット2「3分クッキング」

《登場人物》

- ・料理人
- ・アシスタント
- ・再現する人

《話の展開》

音楽〔※携帯電話で料理番組定番の音楽を流す〕

アシスタント 「今日は料理人のももちゃんをお呼びしました」

料理人 「こんにちは。今日はカカオをつくりたいと思います。」

アシスタント 「材料はこちらです」（ボードを出す）

「カカオの木1、子供3、

大人1」

料理人 「ではさっそく作りたいと思います。まずはカカオの木を用意します。この木に花を咲かせ、実をならせていきます。ここまでに約半年かかります。」

アシスタント 「こちらが半年後のカカオの木です」

料理人 「ここで先程用意した子供を使ってカカオを収穫します。」

暗い系の音楽。

子供ふたりがカカオを収穫してるところを再現。重労働感をだす。

音楽を最初のものに戻す。

料理人 「次は収穫したカカオを選別します」

暗い系の音楽。子供の重労働。

アシスタント 「完成したカカオはこちらです。（カカオを見せる。）本日の注意点

を確認しましょう。カカオの収穫にはたくさんの子供が関わっていること、そしてその際に学校も行かず、薬品や日差しによって危険な目にあっていることも忘れないようにしましょう。ところでガーナの人々はカカオができるまでにこれだけたくさん苦勞をしています、日本ではとても安くチョコレートが販売していますよね？」

料理人 「そうですね。日本では不平等な貿易によって、本来一枚 500 円で売られるべきチョコレートが、100 円以下で売られているのですよ。」

アシスタント 「詳細は2年8組前の掲示物をご覧ください。ということで、今回は100 円で売られてしまうチョコの作り方をご紹介します。それではみなさんさようなら。」

投票の結果、「3分クッキング」は最多得票であった。このスキットを通して何を表現したかったのかと問う筆者に対し、発案者のMは「日本人の残酷さを表現したかった」と答えた。ここには、演劇表現に関する異化効果（対象に対して意図的に距離を置いたり奇異な表現をとったりすることによって、観客に強く印象づけ、世界と自己との関係を自覚的に考えさせようとする芸術表現。ドイツの劇作家、演出家ブレヒトが主張したことで知られる）にも通じる演劇表現の萌芽が見られる。

全班を通して見た教員H、Iの参与観察を筆者の聞き取り（【資料C】）に基づき要約すると以下のようにまとめられる。

教員Hの参与観察

・パフォーマンスというが何をやっているのかわからない。上演の内容よりも、1年以上同じクラスでいることの印象で反応しているのではないのか。“あの人のキャラだ”とわかりあって笑ってい

る。しかし、全体的には物怖じせず、堂々と演技している印象が強い。普段はおとなしいA（生徒）も堂々と大きな声を出していたのが印象的だった。

教員Iの参与観察

・想像以上に役になりきって児童労働やカカオ生産の問題点をわかりやすく、観ている人に訴えかけようとしていた。楽しみながら問題点を伝えようとしていた。自分たちにとって身近な出来事とからめて、フェアトレードの重要性を表現していた。これまで勉強してきたことが反映されていたように思う。学校祭で上演するということも頭にあったのか、伝えようという気持ちが良く出ていた。もともと表現することが好きな生徒たちであることもあるのか、観る側にわかりやすく、楽しくということを念頭においてつくっていたように思う。ただやればいいという感じではなく、どうすれば伝わるか、そのアイデアを盛り込んでいたように思う。改善点としては、学校祭での発表もそうだったが、観客を想定して背景や小道具などがあつた方がよかったと思う。どういう場面設定なのかかわかりづらい。舞台らしいものがあるとよかったのではないか。

また筆者自身の参与観察の結果は以下の通りである。（【資料A】）

筆者の参与観察

・教科的な「知」と身体による学びが一致していないように思う。途上国の人がこの発表を見たらどう思うか、という視点があいまいである。「泣く」行為が多いのはなぜなのか。安っぽい同情にすぎないのではないか。うわべだけの表面的でしらししい同情は、ガーナの人々、子どもたちを理解し支援する姿勢にはつながらないのではないか。ガーナの子どもたちの労働（児童労働）を彼・彼女らが演技することは不可能ではないか。日本の「豊かな」身体ではガーナの子どもたちの身体（痩身、裸足、木登り出来る身体強度、バランス）を表現することは

不可能。問題は、フェアトレードを全く知らない人にどう観てもらうか、自分たちの内輪で（「キャラ」で）ウケルだけではなく、お客さんにどう観てもらうかである。

以上3人の教員の参与観察から判断される演劇的表現の「成果」を記述するならば、以下のようにまとめられるだろう。すなわち、生徒たちは自分たちに身近な出来事とからめてフェアトレードに関わる問題点を物怖じせず表現しようとしていたこと。もともとの資質も関係してか、観客を想定してわかりやすく楽しく伝えようという気持ちが見えたことである。

しかし一方で、今回の生徒の演劇的表現が持つ課題は以下の諸点である。

第一、カカオ豆が先進国の利益のために不当に安く生産・販売されること、それが児童労働を生み出していること等、グローバリズムの構造と問題点の深化は図られることはなかった。

第二、クラスのあの人のキャラが面白いといった表面的な部分で演劇的表現を受け止めていた。一方で児童労働を強いられるようなガーナの子どもたちの身体への理解、想像力が希薄である。

第三、演劇的表現として学校祭で観客を前に発表するための、小道具や背景などへの準備が不足していた。

2012年度の清田祭は、7月6（金）、7（土）の二日間に渡って開催された。上記のスキットを両日で一つずつ上演しようと計画したが、実際上演できたのは最初のスキット①「万引き」のみであった。各部活動の発表や、クラスで行っている模擬店（喫茶）の運営で人手が足りず、二日目は上演できなかった。筆者としては正直残念であった。

パフォーマンスと上演に対する生徒の感想（【資料D】）には以下のようなものが見られる。

*「グループに分かれて、Skit を行うのはとても楽しかったが、学校祭ではあまり伝わらなかったと思う。」（H・A）

*「劇は正直、はずかしかった。でも劇によって、わかりやすく伝えられる部分もあったし、発表のために調べなおしたりできて良かった。」（S・K）

*「パフォーマンスではどうやってこの悲しい事実が伝わるか、みんなで考えて良い機会だった。」（H・W）

*「フェアトレード・パフォーマンスではみんなで真剣に話し合い、一生懸命取り組んでいても面白かったです。」（S・E）

*「[フェアトレードの学習を]2年生になって本格的に国際でやり始めて、ビデオなどを見て児童労働の現状を見て。だけど正直私はそれを身近に感じれない^{ママ}ので自分になにができるのかわからなかった。そして今回フェアトレードのパフォーマンスがあって、私たちはクイズ番組ということでやったけど、他の班は児童労働をテーマにして劇をやるところが多かった。その発表を見ると学校に行けずはたらかなくてはならない子供たちのことをもっとよく考えさせられて前よりももっとどうすればいいのだろうと思うようになった。」（K・N）

パフォーマンスを通して、自分たちにとってはより深くフェアトレードを学ぶ機会になったものの、一般のお客さんに伝えるべきことが十分伝わらなかったのではないかという反省を、生徒たちは謙虚に受け止めている。

上記の「学校祭ではあまり伝わらなかったと思う。」と記したH・Aは、学校祭当日もどこか不機嫌な様子であった。筆者は、今回の授業実践をまとめるに際し、あらためてH・Aに聞き取りを行った（【資料E】）。

「学校祭での寸劇上演をどう思っていたか。」という筆者の問に対し彼女は、「（万引きをする）悪い子を演じるのは楽しかった。でも、スキットの最初の構成が甘かった。た

だ万引きしたチョコがフェアートレード商品だったというだけで、フェアートレードの説明も深くなかったし。大まかなことしか決まなくて。セリフも決まっていなくてその場でポンポン言う感じだった。笑っちゃうのでよくなかった。やっぱり練習が足りなかったから、あれ以上はやりたくなかった。」と答えた。

結び 考察と課題

一連の授業の流れを俯瞰してみると、生徒がカカオ豆生産に携わるガーナの家族や児童労働のことを考え、フェアートレードの必要性を内面的に深く感じ取ったのは、感想文を読む限り、ロールプレイ（シミュレーションゲーム）「家族のお買いもの体験グループワーク」を行ったあとだった。ここで彼・彼女らはグローバリズムの浸透する中、「ではどうすればいいのか」という現実世界へのアクションの必要性を強く感じ取った。そのロールプレイと観客を想定した寸劇（パフォーマンス）とをどのように関係づけてとらえるべきだろうか。

ロールプレイで獲得した対象（ガーナの家族）に対する内面的な同一化を、次に観客と共有（コミュニケーション）していく方法へと発展させる方向で接続させていくことが必要であろう。具体的には、ロールプレイ（シミュレーションゲーム）で行った家族（人物）を主人公として、それぞれの家族の経済的背景をもとに生徒たち自身で物語を書いていくことである。この点で本実践は反省すべき点が残る。ロールプレイで生徒達の内面的同一化をはかっておきながら、観客を想定したスキットづくりは、これまでの学習の連続性をふまえず、生徒に「自由」にスキットを構成させた点である。観客を想定した寸劇を、ロールプレイと同じスキットの延長線上に位置づけることで、少なくとも例えば H・A の「最初の構成が甘かった」というような感

想は出てこなかったであろうと考える。

また、ロールプレイと寸劇（パフォーマンス）との間に、フェアートレードと児童労働に対する調べ学習が挿入されているが、これも、ロールプレイから寸劇への橋渡しをするような形で行うべきであったと考える。つまり、ロールプレイで演じたガーナの家族、日本の家族を主人公にしたスキットを作成することを前提に、生徒に調べ学習を行わせたならば、スキットの内容もこれまでの学習をふまえたより深いものになったと思われる。

さらに「3分クッキング」のように、スキットとしては異化効果に通じる豊かな演劇表現への萌芽も見られ、授業の主題の追求と、観客を想定した演劇表現を総合的に把握する学びへの可能性を秘めているものも見られた。

今後は以上の点をふまえ、ロールプレイと観客を想定した寸劇への接続と発展という反省点に立脚しながら演劇的手法を用いた授業をさらに構想していきたい。

〈参考文献〉

- ① Way, Brian: *Development Through Drama*, 1967/(ブライアン・ウエイ, 岡田陽・高橋美智訳『ドラマによる表現教育』玉川大学出版部, 1977)
- ② 小林由利子・中島裕昭・高山昇ほか『ドラマ教育入門』（図書文化社, 2010）
- ③ 渡部淳『教育における演劇的知—21世紀の授業像と教師の役割』（柏書房、2001年）
- ④ 同 「学習プロセスの演劇的デザイナー EN15 “It’s all about the MONEY”を事例として—」（『演劇学論集』40, 日本演劇学会, 2002）
- ⑤ 高尾隆「即興演劇の授業における教師の支援」（『演劇学論集』40, 日本演劇学会, 2002）

注

- ¹ 特にアフリカで現在でも4人に1人の割合児童労働が行われている。特定非営利活動法人ACE編DVD『おいしいチョコレートの実実』, 2008年.
- ² 例えば、少年演劇センター編「特集：総合的な学習と演劇教育」(『少年演劇』, 1999)、あるいは日本児童演劇協会編『児童演劇』においても「『総合的な学習の時間』と演劇教育」が連載されている(1999-2001)。
- ³ 例えばアメリカのクリエイティブ・ドラマを日本に紹介した好著である佐野正之『教室にドラマを！教師のためのクリエイティブ・ドラマ入門』(晩成書房, 1981)も、ドラマ教育の主たる対象を小学生から中学生としている。
- ⁴ 文部科学省編『高等学校学習指導要領』, 2009年, 第一款「教育課程編成の一般方針」. p. 1.
- ⁵ 文部科学省編, 前掲, p. 24.
- ⁶ 文部科学省編, 前掲, p. 32.
- ⁷ 小林由利子・中島裕昭ほか『ドラマ教育入門』(図書文化社, 2010, p. 10)
- ⁸ 特定非営利活動法人ACE編前掲, 2008年.
- ⁹ マーク・フランシス監督, 『おいしいコーヒーの実実』, UPLINK DVD COLLECTION, 2006年.
- ¹⁰ 札幌市菊水にある「これからや」.
- ¹¹ 特定非営利活動法人ACE『おいしいチョコレートの実実 ～働く子どもたちとわたしたちのつながり～ワークショップガイドブック』, 2008, p. 7-10.
- ¹² 学校祭での二日間にわたる活動の純利益は1万669円であった。この収益で粉ミルクや紙おむつを購入し、冬休み中に実施する「海外ボランティア実習」(希望者対象。隔年実施)で、ベトナムのホーチミン市にある社会福祉施設「マンノン孤児院」に届けている。今年2013年も1月4日(金)～10日(木)にかけて行い、4回目の実施となった。